

# 対人恐怖における優越コンプレックスについて

西村 美咲・井上 健

## 1. 序 論

他人の目を気にしすぎる、また自己主張が下手で、周囲に合わせることを重要視する、というのは日本人に対する典型的な評価であり、自他共に認めるところである。以前は、それは気配りのできる、気の利くこととして賞賛されていたはずである。しかし、最近では、国際化が進む中で個人主義や個性の尊重という考えがもてはやされるようになり、そうした日本人的な価値観が良い評価をされる時代ではなくなってきた。あいまいさが許されない。イエスとノーをはっきりと言わなければならない。他人を意識しすぎて自分の行動を制限するということが嫌悪される。はっきりと自己主張ができるということが、現代人として立派であり、好ましいと考えられている。

しかし、日本の社会は先に述べたような伝統的な価値観で出来上がってきたのであり、歴史的にそのような背景がある限り、今すぐ西洋のような個人主義の考え方ができるかといっても、そう簡単にできるものではないだろう。他人からの評価を意識しがちな日本社会の中で、自分に自信を持ち、周囲の目を気にすることなく堂々と他人と付き合うということが苦手だと感じている人もいるのではないだろうか。とにかく、日本の現状、また日本人であるということと、対人場面における不安や緊張といった感情というものは、切り離すことのできない関係にあると考えられる。

### 1. 日本の伝統的文化と価値観

対人恐怖症と日本の文化との関係は、先にも述べたように、これまでも多く言及されている。欧米諸国と比べても、対人恐怖症は日本に特に多いといわれているが、それは、対人恐怖という症状が、日本人の性格や文化において生じやすく、またそれによって強められていると考えられるためである。

対人恐怖傾向が強い日本人は、西欧と違って他人との差別相、独自相より、他人との同一相に重点があり、「自分は他人と本質的に変らぬ」という意識を通じて、つねに他者を志向しており、他者から決定的に離れることがない(三好, 1970)。他人との同一相に重点を置くという平等感が強すぎると、どうなるか。「自分は自立

した他人と変らぬ人間である」という自己意識が育ち、そのことが逆に他人との差異に敏感な人間を作ってゆきやすくなる。

近藤(1964)は、「配慮的要請」と「自己主張的要請」という言葉を使って、日本文化の特徴的な性格を述べた。日本では、家の中でも、その特徴的空間状況から、人の顔色や、まなざしや、振る舞いに敏感になる。そうして、そのような変化に敏感に気がつく子供は、利発な子供とほめられ、人の気持ちを察して、それに適応する子供は、気が利く素直なよい子といわれるようになる、と指摘している。それと同時に、近藤は、自分の欲求や感情を先に立てず、周りのそれを尊重することに気を使うことが、思いやりのあることと賞賛されるとし、自分の意見や、気持ちを表現しないか、またはほかすことが、謙遜でおくゆかしいことになる、と「配慮的要請」を生み出す精神状況につなげている。

### 2. 日本の伝統的価値観と新たな西欧的価値観

河合(1975)は、西洋と日本の倫理観を「個の倫理」と「場の倫理」と呼び、「場の倫理」の日本の傾向に対し、「個の倫理」の傾向を無意識的に強く感じるために起こる不適応が対人恐怖を引き起こすと述べている。「個の倫理」とは、西洋における、個人の成長、個人の自我の確立に高い価値をおく倫理観を、「場の倫理」とは、まず何よりも「全体としての場」が先に形成され、その場の平衡状態をいかに保つかということを重要とする倫理観を指す。また、加藤(1964)は、そのような配慮的性格というものはかつての「伝統的志向」にすぎず、現代日本の、「大衆社会」に向いての急激な変化における混然とした精神状況こそが「日本的」特性となっている、と述べられている。ここでも、伝統的な日本の価値観と、西洋的な価値観の間での葛藤を指摘している点で河合と同じである。

もちろん、日本的といわれる内向的で配慮的な考えや価値観というものは、依然として現代にも強く受け継がれているもので、特徴的である。問題となっているのは、その価値観そのものにあるのではなく、その価値観が否定的になりつつある状況と、新しい価値観との間において生まれるとまどいや不安、矛盾、葛藤であると考えられている。このように、昔から対人恐怖心性の傾向

が日本の文化と関連していることは明らかであるが、文化の変遷とともにその原因の形を変えているのも事実である（西園，1970）。

### 3. 矛盾する心理の存在

対人恐怖傾向の強さと自己否定や劣等コンプレックスの強さとは、関連があるといわれている（堀井，2001）。低い自己評価や強い劣等感を持つと、対人場面において緊張しやすいということは、容易に想像でき、理解できることである。それと同時に常に指摘されることは、対人恐怖症における個人の心理の矛盾となる。近藤（1964）は、その人から嫌われないように好かれなければ、という配慮的要請と、他人に優越しなければという自己主張的要請の両者の矛盾が、対人恐怖を生み出す原因であると主張している。また森田（1952）は、対人恐怖は、恥ずかしがることをもって、自ら不甲斐ないことと考へ、恥ずかしがらないようにと苦心する負け惜しみの意地っ張り根性である、と述べた。自分の弱い、劣ったあり方を許容することができない点でそれは負け惜しみであり、自らの不安定な状況を否定し、それから目をそむけて自己の優越性を観念的に主張する点で、意地っ張りとなる（近藤，1970）。また三好（1970）は、対人恐怖症者とは、うぬぼれていながら完全にはうぬぼれ切れていない人間であり、現実的な他者との関係で常に挫折感を味わうと述べた。

本研究では、このような、対人恐怖における矛盾する心理状態に焦点を当てたいと思う。通常私たちが持つ劣等感や、優れていようとする（優越性の追及）は、誰にでも見られる普遍的な欲求である。そして、それは健康で正常な、努力と成長への刺激となるのである。しかし、その劣等感は怒りや悲しみなどの強い感情と結びつき、「劣等コンプレックス」となる。その劣等コンプレックスに対し、過剰な防御反応となって表れるのが、「優越コンプレックス」と呼ばれるものである。つまり、強烈な劣等コンプレックスを持つものは不自然な優越的態度を身につけてゆくのである。

このことから、他人との関係において対人恐怖傾向が強く自己評価が低ければ、その内側に強い自意識と優越コンプレックスを抱くという仮説を立て、それを明らかにすることを、本研究の目的とする。

## II. 方法

### 1. 調査の手続き

2007年9月下旬に、兵庫県下の私立の4年制大学に通う学生141名を対象に、無記名での質問紙による調査を実施した。

調査の方法として、大学内の教室において授業中に一斉に配布・回収した。なお、統計処理には統計ソフト

SPSS 15.0 J for Windows を使用した。

## 2. 質問紙の構成

### ①対人恐怖心性尺度

堀井・小川（1996）によって作成されたものである。全30項目で、「自分や他人が気になる悩み」、「集団に溶け込めない悩み」、「社会的場面で当惑する悩み」、「目が気になる悩み」、「自分を統制できない悩み」、「生きていくことに疲れている悩み」という6つの下位尺度によって構成されている。本調査では、全30項目のうち、26項目を抽出し、回答者の対人恐怖傾向について測定した（尺度①）。評定は、「あてはまらない」を1点、「あてはまる」を4点とした4段階評定で行った。

### ②自己評価の意識調査項目

梶田（1980）によって作成されたものである。全30項目で構成されている本尺度から、自尊感情や優越コンプレックスの強さを測ると思われる10項目を抽出した（附録参照）。以下、本尺度を自己意識尺度（尺度②）と呼ぶ。評定は「あてはまらない」場合を1、「あてはまる」場合を4とする4段階で回答を求めた。

先行研究でも指摘されているように、強気である優越コンプレックスが弱気の劣等コンプレックスに隠れて表れにくい（内沼，1977）という場合を考えて、特に2つめの尺度を用いた質問の前には、「普段自分が考えるありのままの自分を頭において」回答するように強調して教示をした。

## III. 結果

### 1. 各尺度の得点

調査の結果得られた各尺度における得点の平均値と標準偏差を求めた。対人恐怖心性尺度（尺度①）の各項目の得点および合計点を対人恐怖心性得点で、自意識尺度（尺度②）の各項目の得点および合計得点を自意識得点で示す（Table 1）。

### 2. 対人恐怖心性尺度の得点別における自己意識尺度の各問の平均点

対人恐怖心性尺度の得点別に、自己意識尺度の各問の平均点を折れ線グラフで示す（Figure 1）。

### 3. 因子分析

対人恐怖心性尺度26項目について、因子分析法（主因子法，Promax 回転）を行った。固有値が1.0以上の基準とスクリープロットの減衰状況から、4つの因子を抽出した（Table 2）。信頼性の検討のため、クロンバックの $\alpha$ 係数算出したところ $\alpha = .929$ であった。

第1因子は、「根気がなく、何事も長続きしない」「すぐに気持ちがあくじける」「生きていくことに価値を見出

Table 1 各尺度の平均値と標準偏差

|                                     | 平均値  | 標準偏差  |
|-------------------------------------|------|-------|
| <b>対人恐怖心性得点</b>                     |      |       |
| 問 1. 他人が自分をどのように思っているのかとても気になる      | 3.1  | 0.76  |
| 問 2. 人と話をする時、目をどこにもっていいかわからない       | 2.1  | 0.98  |
| 問 3. 意志が弱い                          | 2.5  | 0.92  |
| 問 4. 集団の中に溶け込めない                    | 2.4  | 0.89  |
| 問 5. 生きていることに価値を見出せない               | 1.6  | 0.82  |
| 問 6. 人と目を合わせていられない                  | 1.8  | 0.97  |
| 問 7. 引っ込み思案である                      | 2.5  | 0.92  |
| 問 8. 何をやってもうまくいかない                  | 2.0  | 0.80  |
| 問 9. グループでの付き合いが苦手である               | 2.5  | 1.00  |
| 問 10. 自分が相手の人に嫌な感じを与えているように思ってしまう   | 2.5  | 0.94  |
| 問 11. いつも疲れているような感じがする              | 2.2  | 0.87  |
| 問 12. 顔をジーっと見られるのがつらい               | 2.3  | 0.97  |
| 問 13. 人との交際が苦手である                   | 2.2  | 0.93  |
| 問 14. すぐに気持ちがくじける                   | 2.3  | 0.95  |
| 問 15. 人と会うとき、自分の顔つきがきになる            | 2.3  | 1.00  |
| 問 16. 充実して生きている感じがしない               | 1.8  | 0.90  |
| 問 17. 人がたくさんいるところでは気恥ずかしくて話せない      | 2.4  | 1.02  |
| 問 18. 仲間の中に溶け込めない                   | 2.0  | 0.83  |
| 問 19. 自分が人にどう見られているのかクヨクヨ考えてしまう     | 2.5  | 0.97  |
| 問 20. 会議などの発言が困難である                 | 2.4  | 1.09  |
| 問 21. 計画を立てても実行が伴わない                | 2.4  | 0.91  |
| 問 22. 人が大勢いると、うまく会話の中に入っていけない       | 2.6  | 0.95  |
| 問 23. 向かい合って仕事をしている時、相手に顔を見られるのがつらい | 2.0  | 0.87  |
| 問 24. 根気がなく、何事も長続きしない               | 2.1  | 0.92  |
| 問 25. 自分のことが相手に知られるのではないかとよく気にする    | 2.0  | 0.95  |
| 問 26. 人前に出るとオドオドしてしまう               | 2.3  | 0.94  |
| 合 計                                 | 58.7 | 14.48 |
| <b>自己意識得点</b>                       |      |       |
| 問 1. 私は人とうまく付き合っていける方です             | 2.6  | 0.83  |
| 問 2. 私はどんな不幸に出会っても、くじけないだろうと思います    | 2.2  | 0.92  |
| 問 3. 私は自分の主張を通すほうです                 | 2.5  | 0.84  |
| 問 4. 私は時々、他の人からうらやましがられることがあります     | 2.3  | 0.82  |
| 問 5. 私は現在の自分に満足しています                | 2.4  | 0.93  |
| 問 6. 私は自分に自信を持っています                 | 2.3  | 0.90  |
| 問 7. 私は人から馬鹿にされたりすることには我慢できません      | 2.7  | 0.88  |
| 問 8. 私は他の人に比べて能力などの点で優れていると思います     | 2.0  | 0.71  |
| 問 9. 私は他の人から尊敬されるような人間になるだろうと思います   | 2.0  | 0.78  |
| 問 10. 私は現在の自分が幸福だと思います              | 3.0  | 0.81  |
| 合 計                                 | 23.9 | 4.40  |

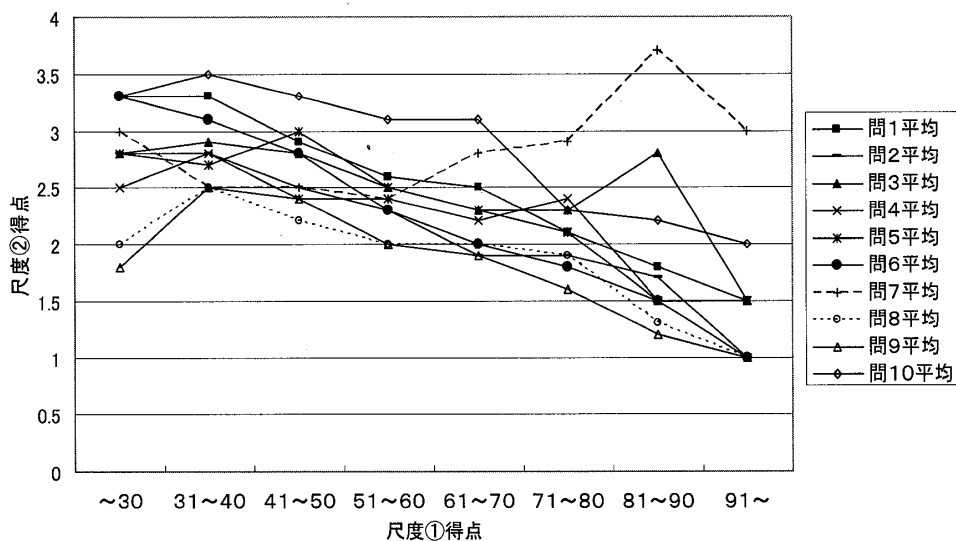


Figure 1 尺度①の得点別に見た尺度②の各問の平均点

せない」などの項目に負荷が高かった。物事を継続して行ったり目標を持ったりすることができないということ

は、疲れを感じていて、やる気が起きないでいると考えられる。したがってこれらを「消極・倦怠」の因子とし

Table 2 尺度①因子分析結果

|      | 因子 1        | 因子 2         | 因子 3  | 因子 4        |
|------|-------------|--------------|-------|-------------|
| 問 24 | <b>.811</b> | -.065        | .028  | -.221       |
| 問 14 | <b>.728</b> | .052         | .087  | -.121       |
| 問 25 | <b>.633</b> | .043         | -.090 | .052        |
| 問 8  | <b>.612</b> | -.008        | .256  | -.054       |
| 問 5  | <b>.605</b> | -.310        | .253  | .118        |
| 問 3  | <b>.586</b> | .162         | -.070 | .005        |
| 問 15 | <b>.544</b> | .291         | -.256 | .107        |
| 問 21 | <b>.540</b> | .122         | -.102 | -.018       |
| 問 16 | <b>.508</b> | -.088        | .209  | .090        |
| 問 10 | <b>.499</b> | .051         | .208  | -.011       |
| 問 11 | <b>.422</b> | -.017        | .118  | .162        |
| 問 20 | -.008       | <b>.768</b>  | -.024 | -.060       |
| 問 17 | -.105       | <b>.705</b>  | .087  | .068        |
| 問 26 | .068        | <b>.627</b>  | .084  | .100        |
| 問 22 | .072        | <b>.578</b>  | .264  | -.016       |
| 問 7  | -.040       | <b>.515</b>  | .174  | .175        |
| 問 19 | .423        | <b>.489</b>  | -.101 | -.091       |
| 問 1  | .319        | <b>.382</b>  | -.167 | -.002       |
| 問 9  | .029        | <b>-.138</b> | .824  | .057        |
| 問 4  | -.120       | <b>.338</b>  | .752  | -.153       |
| 問 18 | .155        | <b>.003</b>  | .686  | -.052       |
| 問 13 | -.009       | <b>.094</b>  | .672  | .149        |
| 問 6  | -.172       | -.020        | .052  | <b>.854</b> |
| 問 2  | -.149       | .110         | .010  | <b>.760</b> |
| 問 12 | .251        | -.032        | -.050 | <b>.627</b> |
| 問 23 | .315        | .082         | -.088 | <b>.496</b> |

た。

第2因子は、「会議などの発言が困難である」「人がたくさんいるところでは恥ずかしくて話せない」「自分が人にどう見られているのかクヨクヨ考えてしまう」などの項目に負荷が高かった。これらは公の場で不自由を感じたり、ありのままの自分を出せなかったりするということだと考えられるため、「内向的・人見知り」の因子とした。

Table 3 尺度②因子分析結果

|      | 因子 1  | 因子 2  |
|------|-------|-------|
| 問 5  | .752  | -.051 |
| 問 6  | .728  | .108  |
| 問 2  | .615  | -.118 |
| 問 10 | .473  | .064  |
| 問 1  | .313  | .209  |
| 問 4  | -.053 | .675  |
| 問 9  | .024  | .615  |
| 問 8  | .155  | .598  |
| 問 7  | -.335 | .354  |

Table 4 尺度①×「自尊」因子の相関係数

|        |               | 尺度①合計点     | 因子①合計点     |
|--------|---------------|------------|------------|
| 尺度①合計点 | Pearson の相関係数 | 1          | -.591 (**) |
| 因子①合計点 | Pearson の相関係数 | -.591 (**) | 1          |

\*\*p<.001

Table 5 尺度①×「優越」因子の相関係数

|        |               | 尺度①合計点    | 因子②合計点    |
|--------|---------------|-----------|-----------|
| 尺度①合計点 | Pearson の相関係数 | 1         | -.209 (*) |
| 因子②合計点 | Pearson の相関係数 | -.209 (*) | 1         |

\*p<.05

第3因子は、「グループでの付き合いが苦手である」「集団の中に溶け込めない」などの項目に負荷が高かった。これらは、集団や仲間などの大人数での交際が苦手で、一人であることを好むと考えられるため、「孤独」の因子とした。

第4因子は、「人と目を合わせていられない」「人と話をする時、目をどこに持っていいか分からない」などの項目に負荷が高かった。これらは、他人の視線を意識しがちであり、視線を合わせることが苦手であると考えられる。したがって、「視線恐怖」の因子とした。

次に、自己意識尺度10項目に関して、因子分析法(主因子法, Promax 回転)を行った。その際、問3は他の項目との共通性が低かったため削除した。その後もう一度因子分析法を行った結果、固有値が1.0以上の基準と、スクリープロットの減衰状況によって2因子を抽出した(Table 3)。信頼性の検討のため、クローンバックの $\alpha$ 係数算出したところ $\alpha=.720$ であった。

第1因子は、「私は現在の自分に満足しています」「私は自分に自信を持っています」「私はどんな不幸に出会っても、くじけないだろうと思います」などの項目に負荷が高かった。自分に満足し、自信を持っていることは、自分が自分自身をありのままに評価できているからだと考えられる。したがって、「自尊」の因子とした。

第2因子は、「私は時々、他人からうらやましがられることがあります」「私は他の人から尊敬されるような人になると思います」などの項目に負荷が高かった。これらは、全て他人との関係の間に生じる感情であり、他人と自分を比較し、自己判断していると考えられる。したがって、「優越」の因子とした。

#### 4. 相関分析

対人恐怖心性尺度の得点と、自己意識尺度の因子分析で取り出した「自尊」の因子の得点の相関を見るため相関分析を行った(Table 4参照)。その結果、負の相関が見られた( $r=-.591, p<.001$ )。

対人恐怖心性尺度の得点と、自己意識尺度の因子分析で取り出した「優越」の因子の得点の相関を見るため相

Table 6 分散分析表

| 変 動 因          | 平方和     | 自由度     | 平均平方   | F      |        |
|----------------|---------|---------|--------|--------|--------|
| 被験者間           |         |         |        |        |        |
| 尺度①合計点         | 71.568  | 1       | 71.568 | 60.127 | p<.001 |
| 被験者内           |         |         |        |        |        |
| 尺度②質問項目        | 62.313  | 6.801   | 9.163  | 12.011 | p<.001 |
| 尺度②質問項目×尺度①合計点 | 32.835  | 6.801   | 4.828  | 6.329  | p<.001 |
| 全 体            | 613.188 | 560.653 |        |        |        |

関分析を行った (Table 5 参照)。その結果、両者の相関は乏しかった ( $r = -.209, p < .05$ )。

## 5. 分散分析

対人恐怖心性尺度の合計得点について、四分位で分割し、最も高い群を高群、最も低い群を低群と位置づけした。

対人恐怖心性得点の高群と低群の間、および自己意識尺度の間1から問10までの各項目の間に平均値の差について、二元配置分散分析を行った。尺度①合計点要因は被験者間要因、尺度②質問項目要因は被験者内要因である。分散分析表を Table 6 に示す。結果は尺度①合計点要因に有意な差がみられ ( $F = 60.127, d.f. = 1, p < .001$ )、尺度②質問項目要因にも有意な差がみられた ( $F = 12.011, d.f. = 6.801, p < .001$ )。その後対人恐怖心性得点の高群と低群に分け、それぞれに多重比較 (Bonferroni の方法) を行った。対人恐怖心性得点の高群において、5% 水準で有意差がみられた組み合わせは、 $2 < 3, 6 < 3, 9 < 3, 1 < 7, 2 < 7, 4 < 7, 5 < 7, 6 < 7, 8 < 7, 9 < 7, 6 < 10, 8 < 10, 9 < 10, 9 < 4$  であった。自己意識尺度の間7に他の項目との差が集中してみられ、問3と問10以外の全ての項目に対して問7の得点が高いと高かった。

対人恐怖心性得点の低群において、5% 水準で有意差がみられた組み合わせは、 $4 < 1, 8 < 1, 9 < 1, 2 < 10, 4 < 10, 7 < 10, 8 < 10, 9 < 10, 8 < 6$  であった。自己意識尺度の間10にほかの項目との差が集中してみられ、問1と問5、問6以外の全ての項目に対して問10の得点が高いと高かった。

## IV. 考 察

対人恐怖心性尺度の得点が高くなればなるほど、全体的に自己意識尺度の得点が低くなっていた (Figure 1)。しかし、その中で、自己意識尺度の間7「人から馬鹿にされることには我慢できない」という項目において、他の項目の平均得点と同様の傾向を示さなかった。対人恐怖傾向の極端に低い群と高い群における問7の平均得点は同じであるが、対人恐怖心性尺度の得点が50点~90点の群においては、その得点が高いほど問7の得点も高くなった。対人恐怖心性尺度の高群と低群の間、および自己意識尺度の間1から問10までの各項目の間に平均値の差についての二元配置分散分析では、どちらにも有

意な差がみられた。このことから、対人恐怖心性尺度の得点の高群と低群における自己意識尺度の各問の得点パターンが異なっており、高群と低群で自己意識尺度の各問の得点の間に差があった。さらに、多重比較で、対人恐怖心性尺度高群においては問7「人から馬鹿にされることに我慢できない」が他の項目に対して有意に得点が高く、低群においては問10「私は現在の自分が幸福だと思います」が他の項目に対して有意に得点が高い傾向にあった。このことから、対人恐怖心性傾向が強いほど人から馬鹿にされたくないという思いが強く、またその傾向が弱いほど自分自身を幸せだと感じていると解釈することができる。

対人恐怖心性尺度の得点と、自己意識尺度の「自尊」と「優越」の因子の相関分析では、自尊因子とは負の相関が見られたが優越因子との相関は乏しかった。対人恐怖心性得点が高いほど自尊得点が高いということは、先行研究で示されている結果と同様であり (岡田・永井, 1990)、対人恐怖傾向が強ければ、自尊心が乏しいといえる。

人から馬鹿にされることに我慢ならないという感情は、他人から批判されることへの反発につながると考えられる。このような感情を強く持つ人達は、対人恐怖心性尺度では自己評価が低いという結果を得たにも関わらず、人から低い評価で自分を見られることには我慢ならない。つまり、プライドが高く、それを傷つけられることに対して非常に敏感なのである。しかし、本当のプライドを持つ人は、自らをあるがままにとらえ評価し、必要ときには他者に素直に助けを求めるものであり、十分に適応している人たちは、むしろ自分への批判を素直に受け入れることができる (速水, 2006)。自分に向けられた批判に対して過剰な反応をするということは、自分に自信がないことの表れなのである。自尊感情とは、相対比較によって自分は誰々よりもよい、とする判断からではなく、自己の基準に基づいて、絶対的評価で自分をよい、満足できるとする場合に生じるものであるといわれている。その視点で考えると、彼らは、自尊心という自己を評価できるものさしを自分自身の中に持っていないために、常に他人を意識し、自分が他人の目にどう映っているかを気にすることで自己を保っているといえる。

多くの先行研究でも述べられているように、これまで

の対人恐怖における典型的な要因は、他人との関わりにおいて、「人に迷惑をかけるのではないか」、「人から変に思われるのではないか」という心理状態であった。しかし、本研究の結果から、そういった加害者意識だけでなく、「人から馬鹿にされるのでは」という被害者意識と、その背後に隠れている不安定で傷つきやすい実態のないプライド、つまり優越コンプレックスというものが強く影響しているのではないかと考えられる。そのために、対人場面において他者を意識し、恐れずにはられないのである。

速水(2006)は、その著書の中で、最近の若者は、他人を見下すことで自尊心を保とうとしていると指摘をしていたが、それは本研究結果からも推測することができる。人から馬鹿にされることに極端に敏感であるということは、その人は対人場面において、他人との関係を「馬鹿にする」か「馬鹿にされる」かの視点から判断しがちなのではないだろうか。先にも述べたように、彼らの自尊心は自分自身の価値を正しく自己認識した結果に得られたものではなく、非常に不安定で傷つきやすいものである。人から馬鹿にされる、あるいは批判されることによって容易にぐらつき、逆に、相手を馬鹿にする、すなわち見下すことでその存在を必死に守ろうとするのではないかと考えられる。そうして、内心自信を喪失している現在の若者は、一種の防衛機制として他者を軽視することで自信を取り戻そうとしている(速水, 2006)のである。

今回は、自己意識尺度のうちの間7が鍵となる調査結果となったが、対人恐怖心性尺度と自己意識尺度の「優越」因子との間の相関関係は明らかにならず、対人恐怖傾向と自己評価の低さに隠れる優越コンプレックスの存在と関連についての仮説は確認されなかった。しかし、人から低く見られたくないという思いが強いということは、つまり自分が勝っていたという優越コンプレク

スの存在に繋がるのではないかと考えられる。本研究では、自尊心に関する質問項目も含めた自己意識尺度を用いて回答を求めたが、隠れた優越コンプレックスを調べるためにはより優越性に焦点を当てた尺度が必要であったといえる。

#### 引用文献

- 三好邦男 1970 対人恐怖症について -「うぬぼれ」の精神病理-。精神医学, 12, 389-394
- 近藤章久 1964 日本文化の配慮的性格と神経質。精神医学, 6, 97-106
- 森田正馬 1960 神経質の本態と療法-精神生活の開眼。白揚社
- 河合隼雄 1975 自我・羞恥・恐怖 -対人恐怖症の世界から-。思想, 62, 670-685
- 加藤正明 1964 「対人恐怖」をめぐる。精神医学, 6, 107-112
- 西園昌久 1970 対人恐怖の精神分析。精神医学, 12, 375-381
- 堀井俊章 2001 青年期における自己意識と対人恐怖心性との関係。山形大学紀要, 12(4), 85-100
- 近藤章久 1970 対人恐怖について-森田を起点として-。精神医学, 12, 382-388
- 堀井俊章・小川捷之 1996 対人恐怖心性尺度の作成。上智大学心理学年報, 20, 55-65
- 堀井俊章・小川捷之 1997 対人恐怖心性尺度の作成(続報)。上智大学心理学年報, 21, 43-51
- 梶田毅一 1980 自己意識の心理学。東京大学出版会
- 内沼幸雄 1977 対人恐怖の人間学-恥・罪・善悪の彼岸-。弘文堂
- 岡田努・永井 徹 1990 青年期の自己評価と対人恐怖心性との関連。心理学研究, 60(6), 386-389
- 速水敏彦 2006 他人を見下す若者たち。講談社